GOSENZO BACKUP

山を下りて、
火のそばで

中村家の物語

これは**架空の家族**で作成した見本です。
実際は、ご本人へのインタビューをもとに台本をお作りし、
ご確認いただいたうえで仕上げます。

先祖バックアッププロジェクト ／ 株式会社シュリオール

プロローグ　山の窯

うちの家のことを、順番に話してみます。

いちばん古い話は、明治のころ、信州の山あいで炭を焼いていた高祖父の話です。会ったことはありません。写真も一枚だけ。それでも、山の上のほうに窯の跡が今でも残っていると、父から聞かされて育ちました。

炭というのは、火を焚いて、火を殺して作るものだそうです。焚きすぎれば灰になる。足りなければ生木のまま。ちょうどいいところで窯を閉じる。その加減が、仕事のすべてだったと聞いています。

私はその話を、子どものころは退屈だと思って聞いていました。まさか自分が、同じことをするようになるとは、思ってもいませんでした。

第二章　焼け跡から、東京へ

曽祖父の代で、家は山を下りました。炭を町へ売りに出るようになって、得意先ができて、暮らしは少しずつ良くなったそうです。

それが、昭和二十年に、全部なくなりました。

戦火で家も窯も焼けて、長男は戻ってきませんでした。祖母は、そのときのことを、一晩で全部なくなった、とだけ言っていました。それ以上は、何度聞いても話しませんでした。

残された一家が東京へ出たのは、昭和二十四年です。何も持たずに出てきた、と聞いています。

祖父が銭湯の釜炊きの仕事に入ったのは、その二年後でした。たまたま入った仕事だと、本人は言っていたそうです。けれど、火の番だけはあの人に任せておけ、と言われるまでに、そう時間はかからなかった。

山で覚えた火加減が、東京の釜の前で、もう一度役に立ったということだと思います。

終章　四代、火のそばで

父は調理師になりました。私は、パン屋になりました。

うちの家系は火の仕事なんですね、と人から言われて、はじめて気がつきました。誰かに勧められたことは、一度もありません。父も、自分で決めたと言っています。

窯の前に立っていると、たまに思うことがあります。高祖父が山で見ていた火と、祖父が釜の前で見ていた火と、いま私が見ている火は、たぶん、そんなに違わない。

うちには、家宝も、立派な家系図もありません。あるのは、火のそばで働いてきた人たちが、続いてきたという事実だけです。

それを、こうして残しておこうと思いました。

※ 本冊子は架空の家族による見本です。実際の納品では、ご本人の声の作品・家系の地図・ご家族専用のページとあわせてお渡しします。
gosenzo-backup.vercel.app